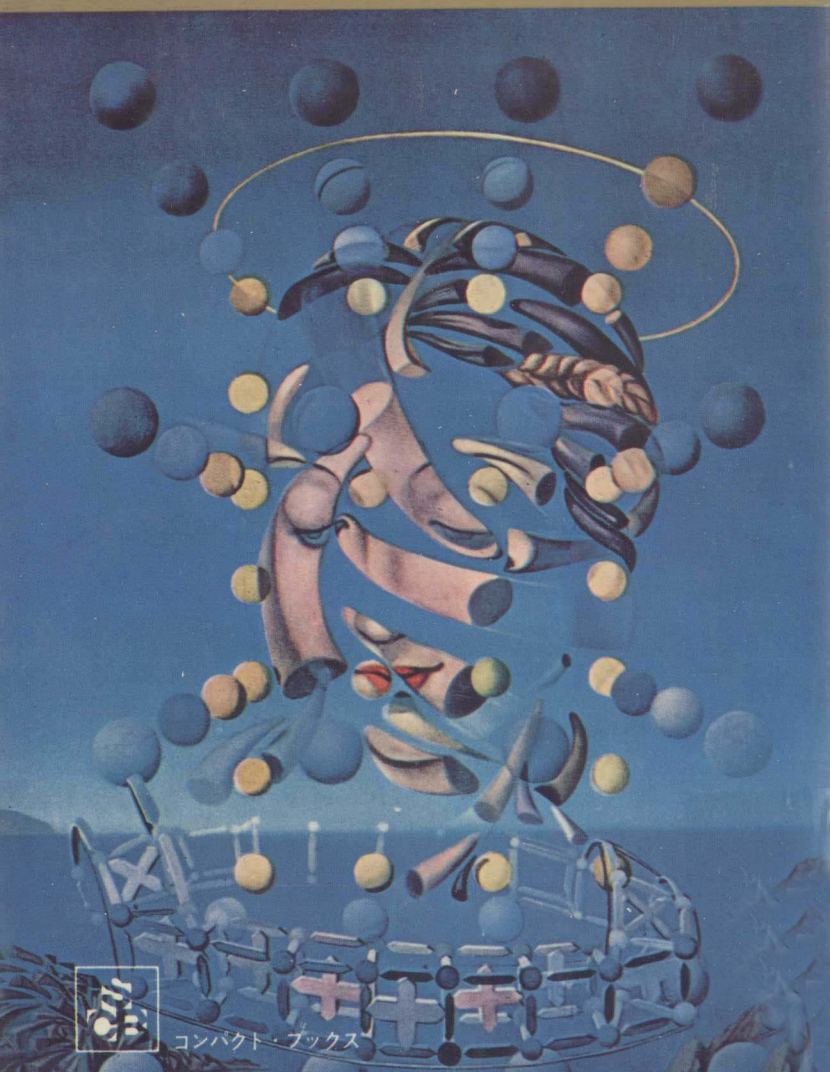


金の糸・銀の糸

石坂洋次郎



コンパクト・ブックス



金の糸・銀の糸

一九六五年十二月十五日 初版発行
一九七二年五月二十五日 古版発行

著者 石坂洋次郎

発行者 陶山 巖

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二の五の十

郵便番号 一〇〇一

電話 東京 (285) 六一一一

振替 東京 一五六五三

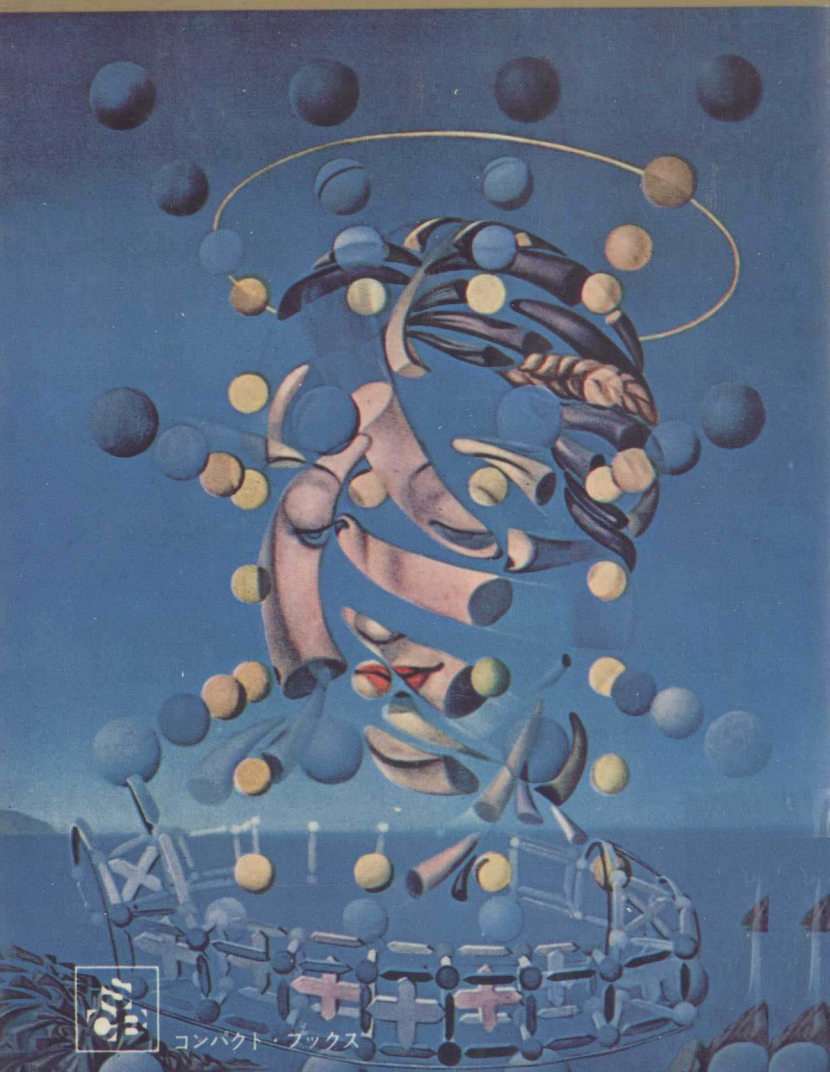
印刷所 大日本印刷株式会社

著者との了解により検
印を廃止いたします。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

金の糸・銀の糸

石坂洋次郎



コンパクト・ブックス



いしざか ようじろう 明治三十三年一月二五日
弘前市生れ。慶大国文科卒。教員生活のかたわ
ら創作活動に従事し「海をみに行く」(昭和二年)
でデビュー。「若い人」(昭和十二年)は空前絶後
のベストセラーといわれた。戦後も「青い山脈」
「石中先生行状記」をはじめ、次々と評判作を
発表、青年層に絶対的人気をもつ「寡作の流行
作家」として文壇に独得な地位を占めている。

金の糸・銀の糸

石坂洋次郎

金の糸・銀の糸

——ある地方の町の人々の物語——

日曜日だった。

桜が過ぎて六月に入ると、雪深い北国のK市にも、晴れた日には、初夏らしい空の色がみられる。屋敷町の垣根や庭の樹々の緑も、日まじに色を濃くしていく。

一步郊外に出ると、ひろびろとした緑の水田や、その間を大きくうねって流れる青い色の大川や、もう雪が消えたいまはまだ灰色の国境いの、山々が重なり合って伸びているのが見晴らされる。

市の中央には昔の城跡の公園がある。松の古木と桜並木、それらの影をうつす外濠や内濠、古めかしい頑丈ないくつかの城門、本丸の端やそのほか要所にそびえている四つほどの白壁のお角櫓^{まがかり}。五月末の桜の季節には近郷近在から、おびたらしい見物人が集まってくるが、それがすぎ去ると、ひっそりとして、商店街がゴテゴテした

都会風に変っていくのに、ここだけは、何十年来、変らない静寂ないこいの場所を市民達に提供している。

K市はこの城跡の公園を中心に上町と下町とから出来ている。公園の東北にあたるむかしの士族屋敷のあとの住宅街には、厚いヒバの垣根をめぐらし、ひろい屋敷内に花や果樹を植えた、屋根の低い家々が並んでいる。マゲを結び、カミシモを着て、大小の刀を差した、こちらの家の主人たちが、毎日、お城のそれぞれの詰所に出かけていった有様が目に浮ぶような気がする。

老人達の話では、武士は身分こそ高いが、町の金持な商人達よりも、はるかに貧しい暮しをしていたもので、例を云えば、本物は質に入れてなかみは竹の刀——いわゆる竹光をさして登城している侍たちもほんとに存在したものだという。

しかし、ともかく、十万石の城下町であっただけに、住民の気質にも、単に利欲だけでは動かない、かたくななものが、まだいくらかは残っている。間もなくしだいにそれもうすれて、こざかしくて深味のない市民気質が出来上っていくことであろう。これは日本全国の市町村がそういう傾向にあるのだから、K市の人々だけを責め

るわけにはいかない。

日曜日のせいか、静かな屋敷町の往来で、子供達が、いろんな遊戯をして遊んでいた。その叫び声や笑い声が、いつもは忘れ果てられたように閑寂な屋敷町に、明るい活気を添えていた。

ヒバの厚い垣根をめぐらした家々の一つに「士族 柿崎平馬」という古びた門札をかかげた家があった。ほんとは、平馬というのは先代の名前であるが、大銀行の支店の次席をしている当主の良太郎は、至って無頓着なたちで、新しい表札も出さず、父親のものをそのままかけているのである。地方の都市では、長く住みついている人々が多いので、郵便や荷物は、その表札でまちがいにしに配達される。

たまたま、柿崎家の前を通る子供が表札に目をやつて尋ねたりする。

「士族ってなあに——？」

「むかし刀をさして威張つて歩いてたサムライのことだよ」

「サムライってえらいんだろ？」

「ああ、昔、あんまり威張つたせいで、いまはたいてい

貧乏しているよ。いまどき『士族』なんていう肩書きを出しているのは、ここの家は貧乏ですと名乗っているよなものだよ」

そんな親子づれの会話が往来から聞こえて来て、柿崎家の人々を苦笑させることもある。

「お父さんの名前を記した新しい陶器の表札ととりかえなさいよ」

「ほんと。家だけよ。『士族』を名乗った古めかしい表札を出しているのは……」

二人の娘達は、ときどきそれを云うが、父親の良太郎は笑つてとり合わない。

「わしはいらん。お母さんの名前の表札を出せよ。『元 P・T・A 副会長・柿崎たまえ』と書いてね」

「いやですよ、貴方。それでなくても、あそこの家は奥さん天下だというデマがとんでいるんだそうですから……」

「デマでもないだろう。火のない所に煙は立たないというからな」

「娘たちの前で……およしなさいよ、貴方……」

「いや、娘達はずうっと生活を共にしているんだから、

うちが奥さん天下かどうか、いちばんたしかな証人だよ。……お前達、どう思う？」

「たしかにその傾向があるわねえ」

「賛成。……でも、お母さん。私達はそういう家風に反対しているわけではないのよ。姉さんも私も、将来うちよりかもう少し度の強い奥さん天下の家庭をつくりたいと思ってるのよ。……それが家庭の在り方として、いちばん温かくて健全なんじゃないかしら……」

「そうよ。ご近所の木村さんの家、ご主人が毎晩のように酔っぱらって帰って来ては、大声で家中の者を怒鳴りつける。奥さんはぶたれたり蹴られたり。可哀そうに中学や小学の子供たちはブルブル慄えているわ。運がよく、山林地主だったので、財産はたくさんあるんでしょうけど、あんな暗い家庭生活では、奥さんも子供達もお気の毒だわ……お母さん、もう少しのさばっても大丈夫よ。これで、私達にもう少しお小遣いをくれると申し分ないんだけど……」

「おふざけでないよ。親をつかまえて、上げたり下げたり……。そんな料簡でいるなら、お小遣いも減俸しますよ、三分の一ぐらいに……」

「それならそれでもいいわ。姉さんも私も、ロクな化粧品やアクセサリーも買えず、野暮ったい格好をしてどこからもお嫁のもらい手が来ず、私達、二人ともオールドミスになって、この家に、家ダニのようにしがみついていますからね……」

「まっ！ どうでしょう、お父さん！……貴方があんまり甘やかすからですよ。何とか云ってやって下さいよ」

「私は感心しながら聞いていたよ。いつの間にか、二人とも、お前と太刀うち出来るぐらいに生長したと思って……。しかもそのやり方が、私をやっつける、ある時のお前のそれにそっくりなんで、私は楽しくなっちゃったよ。……娘たちはいいい母親をもって仕合せだよ」

「まあ、貴方までが……。親子そうがかりで私を攻めるのね……」

「テキはビクともしないさ。よせ来るやからをちぎっては投げ、ちぎっては投げ……」

そこで、みんな笑い崩れてしまった。茶の間の中央の丸いテーブルの上には、煎餅やコーヒーの残骸が散らばっている。

る見込みだ。

——ここで柿崎家の人々を一応紹介しておこう。主人の良太郎は、私大の経済科を卒業してから、郷里のK市の東京に本店がある大銀行の支店に勤務し、県内の支店に三、四度転動したあと、鰹^{かつお}夫となっていた父親の「土族 柿崎平馬」が老衰したので、再三、いい条件の転動の話がもちこまれたにも関わらず、それを断わって、K市の支店に居すわってしまった。

長身で、面長な整った顔立ちをしているが、優しそうな色白の風貌の中にも、それこそ土族の血すじを思わせるピリッとした閃めきがあり、口数は少くおだやかな調子だが、要領はピタリと押えている。ガラガラしないので、もの静かだが、人を犯さず、人に犯されない、ゆったりした風格を備えている。

したがって、本店の重役達の受けもよく、いろんな行きがかり上、次席の地位ににいるが、月給は支店長よりも多い。第一、支店長自身が、良太郎の二、三年後輩にあたっており、良太郎の人柄に一目おいていたので、地位と月給の不合理な点について、いささかの不平も抱いていない。——そういう控え目な生き方をして来た良太郎だが、ここ一、二年のうちには、ほんとの支店長になれ

良太郎は、今年五十四歳で、戦争中は主計中尉として、二年間大陸に従軍したが、無事に帰還して、敵が戦略的価値がないとみたのか、一回も爆撃を受けず、街がそのままに残ったK市の、明治風の赤煉瓦づくりの銀行に、また勤めだったのであった。

趣味は、休日など、ひろい屋敷に野菜をつくったり、花を植えたり、果樹を栽培したり、犬、猫、小鳥などを飼うことだった。麻雀、碁将棋など、勝ち負けで楽しむ遊びごとには、いっさい手を出さなかった。例外は、相撲のテレビファンであること。しかし、それだって、土曜日か日曜日でなければ見るひまがない……。

主婦のたまえは四十九歳。良太郎の長身に較べて、だいぶ背が低いが肉づきがよく色白で、目鼻立ちのハッキリした顔立ちなので、夫婦つれだって歩いて、少しも見劣りがしない。口にはぎやかな方だが、頭の回転がいいので、相手を傷つけるようなことはしない。生家は、近くの町の古いつくり酒屋の長女だが、東京の女子大学を出て間もなく、良太郎と見合い結婚をしたのである。

民子と加奈子と年子の二人の女の子（民子は二十三、

加奈子は二十二が、年ごろになると、両親の見合い期間の交際について、うるさく尋ねたが、良太郎は、

「昔のことで忘れたよ。母さんに聞けよ」

と云うし、たまえはたまえで、

「普通と変わったことはありませんよ。お天気の話をしたり、映画の話をしたり、一緒に食事をしたり……。そんなことで三カ月ばかりつき合ってから、私、仲人に○・Kしたのよ、お父さんが無口だったのは、いまと同じことだけど、なんとなく一生を託するに足る人だという感じがしたの……」

「お父さんの見合い結婚というのは分るけど、お母さんのように積極的な気質の人が、恋愛結婚をしなかったのは、どうも腑に落ちないな。何か信念があったの？」

「失恋でもしたのかな？」

母親の気質を呑みこんでいる姉妹は、通り一べんの説明ではなかなか満足しない。自分達の将来の大切な参考にもなることなので、それから——？ それから——？ と、代る代る追究する。

「——お父さまもご承知のことだし、お話しますが、私、東京で女子大学に通つてゐる時、ボーイ・フレンドみ

たいものが出来たの。その男は、ハンサムだし、痒い所に手がとどくように親切だったし、私、ボウとお熱を上げてしまったの。その男がウインクすれば、私はどこへでもついて行つたろうし、何でも与えてしまつたろうと思うわ。ところが、おたがいに愛情を告白しようという気持ちになりかけていたある日、朝の新聞を開くと、その男は女たらしで、欺した一人の女に短刀で刺され、それが動機で身辺を調査すると、自分が通つていた大学の会計室に忍びこんで、授業料の大金を盗んでいたことまで判明したの。——私は直接、身体を汚ごされはしなかったけど、男をみる目がないことでは盲目同然な自分を反省させられて、何べんも死のうかと思つたわ。だからといって、私は、お前達に恋愛否定論を強制しているわけではないの。……ただ、男でも女でも、口前や肌ざわりなど、調子のよすぎる人間には、気を注げなさいよと云つてるだけ……」

「お父さん、その話知つてたの？」

「交際期間中に、私が話しましたもの」

「お父さんは——？」

「（良薬ハロニ苦シ）お前はいい経験をしたよ、と仰有つ

たぎり……」

「もし、その時、お母さんがその男と深いつき合いをしていたら——」

「加奈ちゃん。そんなこと尋ねるものではないわ」と、民子は妹をたしなめた。

「構いませんよ。……もし、そういう関係になつていたら、私は、一人の男にたよらず、なんとかして自分の力で生きる道をきりひらいて行つたでしょうよ。俗に云う、身体を張つた生き方ね。だったら、いまごろ私は、美容師かデザイナー、あるいは飲屋のマダムにでもなつていたかも知れないわ……。それが、お父さんのようないい方にめぐり合つて、お前達のような娘を生んで、私はほんとうに仕合せだつたと思つていますわ」

「ねえ、親戚の伯母さんや従姉妹たちが、お母さんとお父さんのお見合いについて、だいぶ変つた話をしているんだけど、あれ、ほんと——？」

「伝説よ。……私、男の問題で、そういうショックを受けたあとだし、はじめは投げやりな気持で、お父さんとお見合ひしたことはほんとよ。わるい心の男でさえなきやあ、大酒飲みでさえなきやあ、多少ボンヤリした人

間でも仕方がないっていう気持……。そして、はじめの間はお父さんを、見かけは品がいいけど、ボンヤリした人だぐらに思つてたわ……」

「伯母さん達の伝説ではね……」

「加奈ちゃん、およしなさいよ。お母さんに恥をかせるものじゃないわ」と、姉の民子が、また、何でもペラペラ云う加奈子をたしなめた。

「いいのよ、いいのよ。加奈子に云わせてもらんなさい」

「伝説第一章ではね、はじめのお見合ひは、公園のお濠に臨んだ料亭で二人ぎりで食事をしたんですって……」

一時間ばかりいる間、二人とも一言も喋らなかつたんだって……。それでいて、ママにもパパにも、窮屈な気が少しもなく、池に面した室に二人ぎりでのいるのが、落ちついてしっくりした、いい気分だった。……そのうち、とつぜんパパが『貴女は女に生れたことを後悔することがありますか？』と尋ねたんだって……。

『いいえ、ございません。貴方は男に生れたことを後悔なさつたことがございますか？』

『いえ、ありません』

禅問答めいたそれだけの会話が あったぎり。しかも料亭の勘定はママがはらったんだって……。いまの話、ほんと、ママ？」

「さあ、禅問答めいた会話のことは忘れたけど、勘定をはらったのは私だったということだけは覚えていますよ。……パパがケチなんじゃなくて、気がつかない、ゆっくりにした人柄なんだということは、あとでしぜんに分つて来ましたけど……」

「じゃあ、途中をはぶいて、伝説の終章に入るわ。……それからしばらく経って、二人はやはり、はじめて会った、お濠端の料亭の座敷で、食事をしたんですと。相変らず二人とも口数が少い。そうこうするうち、ママがお膳の上の里芋の煮つけを、お箸につき刺してペロペロなめてから『貴方、これを召し上りますか？』と、パパの方に差しのべたんですって。すると、パパは箸ごとママのしゃぶった里芋を口に入れて、ムシヤムシヤ食べてから、

『ぼく、こんな甘い物を食べたことはありません！』と感激して答えたんだって……。すると、ママはワツと泣き出して、

『私を貴方のお嫁さんにして下さい！』と訴えたんですって。……私、率直で、庶民的で、少しばかり品がわるくて、とてもいいお話だと思っただけだな……。この伝説、ほんと、ママ？」

「伝説にウソもほんともあるもんですか。伯母さん達がそう思っていれば、それはそれで真実のことになるのよ。……そうねえ、平面的に事実だとは云わないけど、どこか真実の匂いがしないでもないわ。……お前達のお父さんって、いい人だわ」

「善きタネが善き畑にまかれて、善き作物が育ったのね、わが家では——」

両親と、こんな調子で会話する姉の民子は土地の短期大学を卒業して、栄養士になりたい志望である。身体つきは父親に似てスラリとしており、皮膚のつやや顔立ちが母親に似て、整って魅力がある。一つ年下の加奈子も、よくまちがえられるぐらい、風貌は姉に似ているが、民子が父親の良太郎のおだやかな気性を多く受け継いでいるとすれば、加奈子の方は、積極的な母親のたまえの方の気質をよけい受け継いでいる。それが姉妹の関係をかえってスムーズにさせているようだ。同じ気質だった

ら、ぶつかって火花を散らすことがしょっちゅうだろう。そういう加奈子は、高校きりで学校をやめ、いろんな講習会などで、将来、主婦として必要な技術を身につけていた。学校なんて、形式だけのもの——という腹なのだ。

ただ、姉妹の不満とする所は、二人が、一つちがいの年子であるということだ。洋服だって、髪形の形だって、少しづつ変えるように気を配らなければならないし、男の友達だって、民子と加奈子は、内々でお目あてを別にしてつき合わねばならない。

家庭が堅実で、二人とも頭の出来がよく、顔立ちも十人並みなので、しぜんに交際を求める男性も多い。それらの相手と、恋愛や結婚という考えをヌキにしてつき合っていればいいようなものだが、若い娘の場合、なかなかそうはいかない。若い男達が、姉妹の中のどちらがお目あてなのか、プラカードでもかかかって近づいて来られるといいのだが……。

中には、鉤を下していれば、どちらかがバクツと食いつくだらうという、無責任な野心で二人と交わっている男もないとは云えない……。

母親のたまえは、娘たちが異性につき合うことでは、わりあい寛大だった。その方が娘たち自身に責任を感じさせることになって、かえって安全だと思っている。殊に、自分の未婚時代の危い失敗を語って聞かせてあるし、民子も加奈子も、見かけがよく、口前は滑かだが、誠実さに欠けた男に欺されるようなことは、万あるまいと信じていた。

ともかく、柿崎家には、四、五人の若い男達が、ときどき出入りしていた。医大のインターンもあれば、大学を出た勤人もあり、若い会社員もある。

「ねえ、姉さん」と、加奈子がときどき訴えかける。

「父も母もいい人なんだけど、私達を年子に生んだということは一つの失敗ね」

「私はそうも思わないけど……」

「失敗だわ。年が三つ四つちがっていけば、洋服だって姉さんのおさがりを私が着られたろうし、私の方でも、ハッキリ姉さんという考え方で、貴女をあがめ奉ることが出来たらうし、男の人達が遊びに来て、姉さんがおめあてのお客さんということが分るし……。いっそ私達、双生児に生れた方がよかったと思うわ」

「加奈ちゃんと双生児——？　それもわるくないわね。

私、なんだかんだと云うけど、加奈ちゃんを好きなんだから……。そうねえ、双生児に生れて、流行歌手として売り出せばよかったかも知れないわね……」

「そうよ。お姉さんがアルトで私がメツソプラノで……きつと成功したろうと思うわ」

姉妹は半分は苦い味にがの微笑を浮かべて、そんな話をしたりする。

二

柿崎家には、いまのところ、平和な日々が訪れているが、ときどき、みんなの気がかりになる問題が一つあった。それは、姉の民子に婿をとって家を継がせるか、それとも、姉妹二人とも嫁づけてしまおうかということである。

婿をとる場合のことを考えると、家屋敷はあるし、良太郎とたまえが、老後、口を過せる分の準備は出来ているし、婿の収入におんぶしなければならぬという心配はまったくない。しかし、若夫婦としては——娘達ともかくも、男の方では、妻の両親と同居するのは窮屈だろうし、二人ぎりで自由な新婚生活を楽しみたいにちがいない。また、娘達としても、婿を迎えて両親と同居するとなると、双方の間に立たされて、目にみえない心づかいをいろいろさせられるにちがいない。